

い自転車を囲んで、子ども達は楽しそうです。富三も久しぶりのふるさとに、とても安らいだ気持ちになりました。

さて、先ほどから、このにぎやかな遊びの輪に加わらずに、遠くからじっとみんなを見つめている男の子がいました。先ほど出てきたお年よりの、少年時代のすがたです。着物はつぎはぎだらけで、そのそでやえりはよごれて、てかてかと光っています。ひと目で、まずしい家の子であることが想ぞうつきます。この男の子に気づいているのかいないのか、子ども達はまだむちゅうになつて自転車で遊んでいます。

その時です。

「さとちゃんも乗せっぺ。」

という声がありました。富三の声でした。

とつ然の声に、みんなの動きが止まりました。みな、それぞれに顔を見合わせています。その男の子も、どうしてよいのかわからない様子でその場に立つたままです。

「さとちゃんも乗せてやっぺ。」

もう一度富三が言いました。